

「一行(ルカ 24:28)」とは、復活したイエスと二人の弟子。「二人の弟子の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった(24:16)」。「遮られて」と表現されているが、むしろ自ら目をつむっていたのだろう。イエスに望みをかけ(24:21)、弟子になったが殺されてしまい(24:20)、死を納得しようとして「生きているイエス」が目に入らない。

歩む方位の対照性がそれを暗示している。二人の弟子はエルサレムから離れいったが(24:13=死)、復活のイエスとの出会いでエルサレムへ戻った(24:33=命)。

イエスは二人の弟子と同宿し(24:29)、「一緒に食事の席に着いたとき、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった(24:30)」。

聖餐式を想起させる作法だが、復活に固く目をつむっていた弟子の目は、イエスの体(22:19)に与ってこじ開けられる。新しい命は恵みを受けて開かれる。

「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:31)」。実におもしろい。目が開け、分かったその刹那、見えなくなる。これはどういうことであろうか。

この劇的な変化の感じ、直感ではストーンと落ちるのだが、言葉で説明しようとするとうまくない。解説めいたことはやめ、肚にストーンと落ちる感じだけでも伝わればいいか。

二人の弟子に助けてもらおう。

イエスの姿が見えなくなると、「二人は、〔道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか〕と語りあった(24:32)」。

分かり、見えなくなり、燃えていた心を確認め合った。目が遮られていた時点で、イエスの言葉を聞き(24:26~27)、心は燃えていたが自分自身の感覚を把握できなかった。

だが無意識は動いていた。だから二人は「〔一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、日も傾いていますから〕と言って、無理にイエスを引き止めた(24:29)」。

どういうわけかこの謎の人物と離れたくなかった。これが肚にストーンと落ちる感じだ。

「分かったら、見えなくなる」。私のストーンは、二人の弟子の無意識に近い。サン=テグジュペリは星の王子様に「大切なものは見えないんだよ」と語らせたが、「分かる」のだ。見たように説明できることは浅い。見えないまま、復活したイエスが「分かる」ことこそ深い。

「わたしたちの心は燃えていたではないか(24:32)」という生命溢れる感覚が、キリストとの「見えない」出会いではなかったか。それは、他者であったイエスの復活が、なんと私自身において起こり「心が燃えている(24:32)」状態。

「この空しい人生の日々に、わたしはすべてを見極めた。善人がその善のゆえに滅びることもあり、悪人がその悪のゆえに長らえることもある(コヘレト 7:15)」。まさしく、これが見える現実だ。

しかし「一つのことをつかむのはよいが、ほかのことからも手を放してはいけない(7:18)」。善人すぎて「己が罪」を忘れるな、賢すぎて「見えない感覚」を忘れるな。いかに優れていようとも、そのままの人は滅びを招く(7:16)。

勤勉に「一つのことをつかむのはよい」が、恵みである「見えない感覚」を手放すな(7:18)。

いつもの祈り、言葉として現れる祈りは「見える」程度のこと。だが、そこには聖霊が「見えない」姿で宿っている(マテ 8:26)。二人の弟子のように、燃える心を、自覚しないまま抱え続けたい(ルカ 24:32)。



#### 《おまけのひとこと》

春から秋 伝道所の草を幾度となく刈る 高い草も低い草も これは見えること 見えないのは何も抜かず施肥をせず 人は見える程度の草刈りをする それですべての草が 根によって生きる